

2021年3月改訂（第3版）

日本標準商品分類番号

871149

医薬品インタビューフォーム

日本病院薬剤師会の IF 記載要領 2013 に準拠して作成[一部 2018(2019年更新版に準拠)]

非ステロイド性消炎・鎮痛剤(COX-2 選択的阻害剤)

セレコキシブ錠 100mg 「オーハラ」
セレコキシブ錠 200mg 「オーハラ」

CELECOXIB TABLETS 100mg 「OHARA」
CELECOXIB TABLETS 200mg 「OHARA」
(セレコキシブ錠)

剤形	錠剤（素錠）
製剤の規制区分	劇薬、処方箋医薬品 ^注 注) 注意－医師等の処方箋により使用すること
規格・含量	100mg 錠：1 錠中セレコキシブ 100mg を含有する。 200mg 錠：1 錠中セレコキシブ 200mg を含有する。
一般名	和名：セレコキシブ[JAN] 洋名：Celecoxib[JAN]
製造販売承認年月日	製造販売承認年月日：2020年2月17日
薬価基準収載 ・発売年月日	薬価基準収載年月日：2020年6月19日 発売年月日：2020年6月19日
開発・製造販売(輸入)・ 提携・販売会社名	製造販売元：大原薬品工業株式会社
医薬情報担当者 の連絡先	
問い合わせ窓口	大原薬品工業株式会社 お客様相談室 フリーダイヤル 0120-419-363 URL https://www.ohara-ch.co.jp

本 IF は 2021 年 2 月改訂の添付文書の記載に基づき改訂した。
最新の添付文書情報は、PMDA ホームページ「医薬品に関する情報」
<http://www.pmda.go.jp/safety/info-services/drugs/0001.html> にてご確認ください。

IF 利用の手引きの概要－日本病院薬剤師会－

1. 医薬品インタビューフォーム作成の経緯

医療用医薬品の基本的な要約情報として医療用医薬品添付文書（以下、添付文書と略す）がある。医療現場で医師・薬剤師等の医療従事者が日常業務に必要な医薬品の適正使用情報を活用する際には、添付文書に記載された情報を裏付ける更に詳細な情報が必要な場合がある。

医療現場では、当該医薬品について製薬企業の医薬情報担当者等に情報の追加請求や質疑をして情報を補完して対処してきている。この際に必要な情報を網羅的に入手するための情報リストとしてインタビューフォームが誕生した。

昭和 63 年に日本病院薬剤師会（以下、日病薬と略す）学術第 2 小委員会が「医薬品インタビューフォーム」（以下、IF と略す）の位置付け並びに IF 記載様式を策定した。その後、医療従事者向け並びに患者向け医薬品情報ニーズの変化を受けて、平成 10 年 9 月に日病薬学術第 3 小委員会において IF 記載要領の改訂が行われた。

更に 10 年が経過し、医薬品情報の創り手である製薬企業、使い手である医療現場の薬剤師、双方にとって薬事・医療環境は大きく変化したことを受けて、平成 20 年 9 月に日病薬医薬情報委員会において IF 記載要領 2008 が策定された。

IF 記載要領 2008 では、IF を紙媒体の冊子として提供する方式から、PDF 等の電磁的データとして提供すること（e-IF）が原則となった。この変更にあわせて、添付文書において「効能・効果の追加」、「警告・禁忌・重要な基本的注意の改訂」などの改訂があった場合に、改訂の根拠データを追加した最新版の e-IF が提供されることとなった。

最新版の e-IF は、（独）医薬品医療機器総合機構の医薬品情報提供ホームページ（<http://www.info.pmda.go.jp/>）から一括して入手可能となっている。日本病院薬剤師会では、e-IF を掲載する医薬品情報提供ホームページが公的サイトであることに配慮して、薬価基準収載にあわせて e-IF の情報を検討する組織を設置して、個々の IF が添付文書を補完する適正使用情報として適切に審査・検討することとした。

2008 年より年 4 回のインタビューフォーム検討会を開催した中で指摘してきた事項を再評価し、製薬企業にとっても、医師・薬剤師等にとっても、効率の良い情報源とすることを考えた。そこで今般、IF 記載要領の一部改訂を行い IF 記載要領 2013 として公表する運びとなった。

2. IF とは

IF は「添付文書等の情報を補完し、薬剤師等の医療従事者にとって日常業務に必要な、医薬品の品質管理のための情報、処方設計のための情報、調剤のための情報、医薬品の適正使用のための情報、薬学的な患者ケアのための情報等が集約された総合的な個別の医薬品解説書として、日病薬が記載要領を策定し、薬剤師等のために当該医薬品の製薬企業に作成及び提供を依頼している学術資料」と位置付けられる。

ただし、薬事法・製薬企業機密等に関わるもの、製薬企業の製剤努力を無効にするもの及び薬剤師自らが評価・判断・提供すべき事項等は IF の記載事項とはならない。言い換えると、製薬企業から提供された IF は、薬剤師自らが評価・判断・臨床適応するとともに、必要な補完をするものという認識を持つことを前提としている。

[IF の様式]

- ①規格は A4 版、横書きとし、原則として 9 ポイント以上の字体（図表は除く）で記載し、一色刷りとす。ただし、添付文書で赤枠・赤字を用いた場合には、電子媒体ではこれに従うものとする。
- ②IF 記載要領に基づき作成し、各項目名はゴシック体で記載する。
- ③表紙の記載は統一し、表紙に続けて日病薬作成の「IF 利用の手引きの概要」の全文を記載するものとし、2 頁にまとめる。

[IF の作成]

- ①IF は原則として製剤の投与経路別（内用剤，注射剤，外用剤）に作成される。
- ②IF に記載する項目及び配列は日病薬が策定した IF 記載要領に準拠する。
- ③添付文書の内容を補完するとの IF の主旨に沿って必要な情報が記載される。
- ④製薬企業の機密等に関するもの，製薬企業の製剤努力を無効にするもの及び薬剤師をはじめ医療従事者自らが評価・判断・提供すべき事項については記載されない。
- ⑤「医薬品インタビューフォーム記載要領 2013」（以下，「IF 記載要領 2013」と略す）により作成された IF は，電子媒体での提供を基本とし，必要に応じて薬剤師が電子媒体（PDF）から印刷して使用する。企業での製本は必須ではない。

[IF の発行]

- ①「IF 記載要領 2013」は，平成 25 年 10 月以降に承認された新医薬品から適用となる。
- ②上記以外の医薬品については，「IF 記載要領 2013」による作成・提供は強制されるものではない。
- ③使用上の注意の改訂，再審査結果又は再評価結果（臨床再評価）が公表された時点並びに適応症の拡大等がなされ，記載すべき内容が大きく変わった場合には IF が改訂される。

3. IF の利用にあたって

「IF 記載要領 2013」においては，PDF ファイルによる電子媒体での提供を基本としている。情報を利用する薬剤師は，電子媒体から印刷して利用することが原則である。

電子媒体の IF については，医薬品医療機器総合機構の医薬品医療機器情報提供ホームページに掲載場所が設定されている。

製薬企業は「医薬品インタビューフォーム作成の手引き」に従って作成・提供するが，IF の原点を踏まえ，医療現場に不足している情報や IF 作成時に記載し難い情報等については製薬企業の MR 等へのインタビューにより薬剤師等自らが内容を充実させ，IF の利用性を高める必要がある。また，随時改訂される使用上の注意等に関する事項に関しては，IF が改訂されるまでの間は，当該医薬品の製薬企業が提供する添付文書やお知らせ文書等，あるいは医薬品医療機器情報配信サービス等により薬剤師等自らが整備するとともに，IF の使用にあたっては，最新の添付文書を医薬品医療機器情報提供ホームページで確認する。

なお，適正使用や安全性の確保の点から記載されている「臨床成績」や「主な外国での発売状況」に関する項目等は承認事項に関わることもあり，その取扱いには十分留意すべきである。

4. 利用に際しての留意点

IF を薬剤師等の日常業務において欠かすことができない医薬品情報源として活用して頂きたい。しかし，薬事法や医療用医薬品プロモーションコード等による規制により，製薬企業が医薬品情報として提供できる範囲には自ずと限界がある。IF は日病薬の記載要領を受けて，当該医薬品の製薬企業が作成・提供するものであることから，記載・表現には制約を受けざるを得ないことを認識しておかなければならない。

また製薬企業は，IF があくまでも添付文書を補完する情報資材であり，インターネットでの公開等も踏まえ，薬事法上の広告規制に抵触しないよう留意し作成されていることを理解して情報を活用する必要がある。

(2013 年 4 月改訂)

目 次

I 概要に関する項目

1. 開発の経緯…………… 1
2. 製品の治療学的・製剤学的特性…………… 1

II 名称に関する項目

1. 販売名…………… 2
 - (1) 和名…………… 2
 - (2) 洋名…………… 2
 - (3) 名称の由来…………… 2
2. 一般名…………… 2
 - (1) 和名 (命名法)…………… 2
 - (2) 洋名 (命名法)…………… 2
 - (3) ステム…………… 2
3. 構造式又は示性式…………… 2
4. 分子式及び分子量…………… 2
5. 化学名 (命名法)…………… 3
6. 慣用名, 別名, 略号, 記号番号…………… 3
7. CAS 登録番号…………… 3

III 有効成分に関する項目

1. 物理化学的性質…………… 4
 - (1) 外観・性状…………… 4
 - (2) 溶解性…………… 4
 - (3) 吸湿性…………… 4
 - (4) 融点 (分解点), 沸点, 凝固点…………… 4
 - (5) 酸塩基解離定数…………… 4
 - (6) 分配係数…………… 4
 - (7) その他の主な示性値…………… 4
2. 有効成分の各種条件下における安定性…………… 4
3. 有効成分の確認試験法…………… 4
4. 有効成分の定量法…………… 4

IV 製剤に関する項目

1. 剤形…………… 5
 - (1) 剤形の区別, 外観及び性状…………… 5
 - (2) 製剤の物性…………… 5
 - (3) 識別コード…………… 5
 - (4) pH, 浸透圧比, 粘度, 比重, 無菌の旨及び安定な pH 域等…………… 5
2. 製剤の組成…………… 5
 - (1) 有効成分 (活性成分) の含量…………… 5
 - (2) 添加物…………… 5
 - (3) その他…………… 6
3. 懸濁剤, 乳剤の分散性に対する注意…………… 6
4. 製剤の各種条件下における安定性…………… 6
5. 調製法及び溶解後の安定性…………… 7
6. 他剤との配合変化 (物理化学的変化)…………… 7

7. 溶出性…………… 8
8. 生物学的試験法…………… 11
9. 製剤中の有効成分の確認試験法…………… 11
10. 製剤中の有効成分の定量法…………… 11
11. 力価…………… 12
12. 混入する可能性のある夾雑物…………… 12
13. 注意が必要な容器・外観が特殊な容器に関する情報…………… 12
14. その他…………… 12

V 治療に関する項目

1. 効能又は効果…………… 13
2. 用法及び用量…………… 13
3. 臨床成績…………… 13
 - (1) 臨床データパッケージ…………… 13
 - (2) 臨床効果…………… 13
 - (3) 臨床薬理試験…………… 14
 - (4) 探索的試験…………… 14
 - (5) 検証的試験…………… 14
 - (6) 治療的使用…………… 14

VI 薬効薬理に関する項目

1. 薬理学的に関連ある化合物又は化合物群…………… 15
2. 薬理作用…………… 15
 - (1) 作用部位・作用機序…………… 15
 - (2) 薬効を裏付ける試験成績…………… 15
 - (3) 作用発現時間・持続時間…………… 15

VII 薬物動態に関する項目

1. 血中濃度の推移・測定法…………… 16
 - (1) 治療上有効な血中濃度…………… 16
 - (2) 最高血中濃度到達時間…………… 16
 - (3) 臨床試験で確認された血中濃度…………… 16
 - (4) 中毒域…………… 18
 - (5) 食事・併用薬の影響…………… 18
 - (6) 母集団 (ポピュレーション) 解析により判明した薬物体内動態変動要因…………… 18
2. 薬物速度論的パラメータ…………… 19
 - (1) 解析方法…………… 19
 - (2) 吸収速度定数…………… 19
 - (3) バイオアベイラビリティ…………… 19
 - (4) 消失速度定数…………… 19
 - (5) クリアランス…………… 19
 - (6) 分布容積…………… 19
 - (7) 血漿蛋白結合率…………… 19
3. 吸収…………… 19
4. 分布…………… 19
 - (1) 血液-脳関門通過性…………… 19

(2) 血液-胎盤関門通過性	19	(3) 安全性薬理試験	29
(3) 乳汁への移行性	19	(4) その他の薬理試験	29
(4) 髄液への移行性	20	2. 毒性試験	29
(5) その他の組織への移行性	20	(1) 単回投与毒性試験	29
5. 代謝	20	(2) 反復投与毒性試験	29
(1) 代謝部位及び代謝経路	20	(3) 生殖発生毒性試験	29
(2) 代謝に関与する酵素(CYP450 等)の分子種	20	(4) その他の特殊毒性	29
(3) 初回通過効果の有無及びその割合	20	X 管理的事項に関する項目	
(4) 代謝物の活性の有無及び比率	20	1. 規制区分	30
(5) 活性代謝物の速度論的パラメータ	20	2. 有効期間又は使用期限	30
6. 排泄	20	3. 貯法・保存条件	30
(1) 排泄部位及び経路	20	4. 薬剤取扱い上の注意点	30
(2) 排泄率	20	(1) 薬局での取り扱い上の留意点について	30
(3) 排泄速度	20	(2) 薬剤交付時の取扱いについて	
7. トランスポーターに関する情報	20	(患者等に留意すべき必須事項等)	30
8. 透析等による除去率	20	(3) 調剤時の留意点について	30
VIII 安全性(使用上の注意等)に関する項目		5. 承認条件等	31
1. 警告内容とその理由	21	6. 包装	31
2. 禁忌内容とその理由(原則禁忌を含む)	21	7. 容器の材質	31
3. 効能又は効果に関連する使用上の注意とその理由	21	8. 同一成分・同効薬	31
4. 用法及び用量に関連する使用上の注意とその理由	21	9. 国際誕生年月日	31
5. 慎重投与内容とその理由	21	10. 製造販売承認年月日及び承認番号	31
6. 重要な基本的注意とその理由及び処置方法	22	11. 薬価基準収載年月日	31
7. 相互作用	23	12. 効能又は効果追加, 用法及び用量変更追加等の 年月日及びその内容	31
(1) 併用禁忌とその理由	23	13. 再審査結果, 再評価結果公表年月日 及びその内容	31
(2) 併用注意とその理由	23	14. 再審査期間	32
8. 副作用	25	15. 投薬期間制限医薬品に関する情報	32
(1) 副作用の概要	25	16. 各種コード	32
(2) 重大な副作用と初期症状	25	17. 保険給付上の注意	32
(3) その他の副作用	26	X I 文献	
(4) 項目別副作用発現頻度及び臨床検査値異常一覧	27	1. 引用文献	33
(5) 基礎疾患, 合併症, 重症度及び 手術の有無等背景別の副作用発現頻度	27	2. その他の参考文献	33
(6) 薬物アレルギーに対する注意及び試験法	27	X II 参考資料	
9. 高齢者への投与	27	1. 主な外国での発売状況	34
10. 妊婦, 産婦, 授乳婦等への投与	28	2. 海外における臨床支援情報	34
11. 小児等への投与	28	X III 備考	
12. 臨床検査結果に及ぼす影響	28	1. 調剤・服薬支援に際して臨床判断を行うにあたっての 参考情報	35
13. 過量投与	28	2. その他の関連資料	36
14. 適用上の注意	28	付表	37
15. その他の注意	28		
16. その他	28		
IX 非臨床試験に関する項目			
1. 薬理試験	29		
(1) 薬効薬理試験			
(「VI. 薬効薬理に関する項目」参照)	29		
(2) 副次的薬理試験	29		

I. 概要に関する項目

1. 開発の経緯

セレコキシブ錠は非ステロイド性消炎・鎮痛剤であり、本邦では 2007 年に上市されている。

セレコキシブ錠「オーハラ」は、大原薬品工業株式会社が後発医薬品として開発を企画し、薬食発第 1121 第 2 号（平成 26 年 11 月 21 日）（付表参照）に基づき規格及び試験方法を設定、安定性試験、生物学的同等性試験を実施し、2020 年 2 月に製造販売承認を取得、2020 年 6 月に上市した。

2. 製品の治療学的・製剤学的特性

- (1) セレコキシブは COX-1 に対して COX-2 を数倍選択的に阻害することにより局所に生成される PG を抑制し、抗炎症・鎮痛作用を示すと考えられる。（「VI. 薬効薬理に関する項目」参照）
- (2) 成分名、含量、屋号が印字された錠剤である。（「IV. 製剤に関する項目」参照）
- (3) バラ包装容器に副片付きラベルを採用し、はがしてキャップに貼付することができる。
- (4) 成分名、含量、屋号、薬効、GS1 コードが表示された PTP シートである。
- (5) 個装箱には QR コード（添付文書）、表示イメージ図、製品情報カード、新バーコードの 4 つの製品情報が盛り込まれている。
- (6) 重大な副作用として、**ショック、アナフィラキシー、消化性潰瘍、消化管出血、消化管穿孔、心筋梗塞、脳卒中、心不全、うっ血性心不全、肝不全、肝炎、肝機能障害、黄疸、再生不良性貧血、汎血球減少症、無顆粒球症、急性腎障害、間質性腎炎、中毒性表皮壊死融解症 (Toxic Epidermal Necrolysis : TEN)、皮膚粘膜眼症候群 (Stevens - Johnson 症候群)、多形紅斑、急性汎発性発疹性膿疱症、剥脱性皮膚炎、間質性肺炎**（いずれも頻度不明）が報告されている。（「VIII. 安全性（使用上の注意等）に関する項目」参照）

II. 名称に関する項目

1. 販売名

(1) 和名

セレコキシブ錠 100mg 「オーハラ」

セレコキシブ錠 200mg 「オーハラ」

(2) 洋名

CELECOXIB TABLETS 100mg 「OHARA」

CELECOXIB TABLETS 200mg 「OHARA」

(3) 名称の由来

通知「薬食審査発第 0922001 号」に基づき設定した。

2. 一般名

(1) 和名(命名法)

セレコキシブ(JAN)

(2) 洋名(命名法)

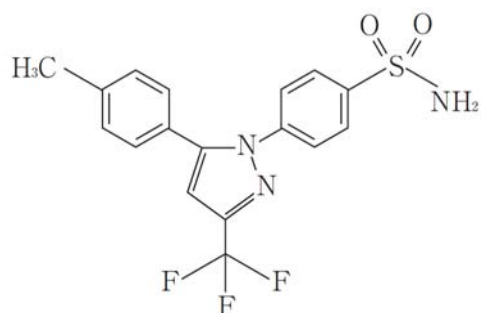
Celecoxib (JAN)

celecoxib (INN)

(3) ステム

-coxib : 選択的 COX 阻害剤

3. 構造式又は示性式



4. 分子式及び分子量

(1) 分子式 : C₁₇H₁₄F₃N₃O₂S

(2) 分子量 : 381.37

5. 化学名 (命名法)

4-[5-(4-Methylphenyl)-3-(trifluoromethyl)pyrazol-1-yl]
benzenesulfonamide (IUPAC 命名法)

6. 慣用名, 別名, 略号, 記号番号

該当資料なし

7. CAS 登録番号

169590-42-5

Ⅲ. 有効成分に関する項目

1. 物理化学的性質

(1) 外観・性状

本品は白色の粉末または結晶性の粉末である。

(2) 溶解性

該当資料なし

(3) 吸湿性

該当資料なし

(4) 融点(分解点), 沸点, 凝固点

該当資料なし

(5) 酸塩基解離定数

該当資料なし

(6) 分配係数

該当資料なし

(7) その他の主な示性値

該当資料なし

2. 有効成分の各種条件下における安定性

該当資料なし

3. 有効成分の確認試験法

(1) 紫外可視吸光度測定法

(2) 赤外吸収スペクトル測定法 (臭化カリウム錠剤法)

4. 有効成分の定量法

液体クロマトグラフィー

IV. 製剤に関する項目

1. 剤形

(1) 剤形の区別, 外観及び性状

販売名	剤形	色調	外形・サイズ・識別コード※		
			表面	裏面	側面
セレコキシブ錠 100mg 「オーハラ」	割線入り 素錠	白色			
			直径：8.0mm 厚さ：2.8mm 重量：180 mg 識別コード※：セレコキシブ 100 オーハラ		
セレコキシブ錠 200mg 「オーハラ」	割線入り 素錠	白色			
			長径：13.0mm 短径：6.5mm 厚さ：5.2mm 重量：360 mg 識別コード※：セレコキシブ 200 オーハラ		

※錠剤両面に印刷表示

(1) 製剤の物性²⁾

品名	硬度 (N, n=10)
セレコキシブ錠 100mg 「オーハラ」	53.8
セレコキシブ錠 200mg 「オーハラ」	82.1

(2) 識別コード

セレコキシブ錠 100mg 「オーハラ」：セレコキシブ 100 オーハラ

セレコキシブ錠 200mg 「オーハラ」：セレコキシブ 200 オーハラ

(3) pH, 浸透圧比, 粘度, 比重, 無菌の旨及び安定な pH 域等

該当しない

2. 製剤の組成

(1) 有効成分(活性成分)の含量

セレコキシブ錠 100mg 「オーハラ」：1 錠中セレコキシブ 100mg を含有

セレコキシブ錠 200mg 「オーハラ」：1 錠中セレコキシブ 200mg を含有

(2) 添加物

乳糖水和物、低置換度ヒドロキシプロピルセルロース、ラウリル硫酸ナトリウム、
ヒドロキシプロピルセルロース、ステアリン酸マグネシウム

(3) その他

該当資料なし

3. 懸濁剤, 乳剤の分散性に対する注意

該当しない

4. 製剤の各種条件下における安定性

(1) 加速条件下での安定性試験³⁾

- ・ 保存形態

PTP 包装：PTP（ポリ塩化ビニル、アルミ箔）包装したものを紙箱に入れた。

バラ包装：ポリエチレン製容器に入れ、ポリプロピレン製キャップで封をし、紙箱に入れた。

- ・ 保存条件：40℃(±2℃)、75%RH(±5%RH)

- ・ 保存期間：6 ヶ月

- ・ 試験項目：性状、確認試験、純度試験（類縁物質）、含量均一性試験、溶出試験、定量

- ・ 試験方法：製剤の規格及び試験方法に従った。

セレコキシブ錠 100mg、200mg 「オーハラ」

保存条件	期間	保存形態	結果
40℃(±2℃)、 75%RH(±5%RH)	6 ヶ月	PTP 包装 (100 錠)	全て変化なし
		PTP 包装 (140 錠)	全て変化なし
		バラ包装	全て変化なし

(2) 無包装状態での安定性試験²⁾

セレコキシブ錠 100mg、200mg 「オーハラ」の無包装の製剤について、各種条件下で保存し、安定性試験〔性状、溶出試験、定量、硬度〕を行った。

セレコキシブ錠 100mg、200mg 「オーハラ」

	保存条件	結果
温度	40℃、3 ヶ月(遮光・気密容器)	変化なし
湿度	25℃、75%RH、3 ヶ月(遮光・開放)	変化なし
光	総照射量 120 万 lx・hr(25℃、60%RH)(開放)	変化なし

(3) 分割後の安定性

セレコキシブ錠 100mg、200mg「オーハラ」を割線に沿って分割後保存し、安定性試験〔性状、含量均一性試験、溶出試験、定量〕を行った。

セレコキシブ錠 100mg、200mg「オーハラ」

保存条件	結果
25°C、60%RH、3 ヶ月(遮光・開放)	変化なし

5. 調製法及び溶解後の安定性

該当しない

6. 他剤との配合変化（物理化学的变化）

該当しない

7. 溶出性

後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドラインに基づく溶出試験⁴⁾

後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドライン等の一部改正について(平成 24 年 2 月 29 日 薬食審査発 0229 第 10 号)に準じ試験を実施した。

試験方法：日局一般試験法「溶出試験法パドル法」による。

試験液量：900mL

温度：37°C±0.5°C

試験結果：「後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドライン」の判定基準に適合した。これによりセレコキシブ錠 100mg「オーハラ」及びセレコキシブ錠 200mg「オーハラ」の溶出挙動は、全ての試験条件において標準製剤と類似していると判定された。

(1) セレコキシブ錠 100mg「オーハラ」

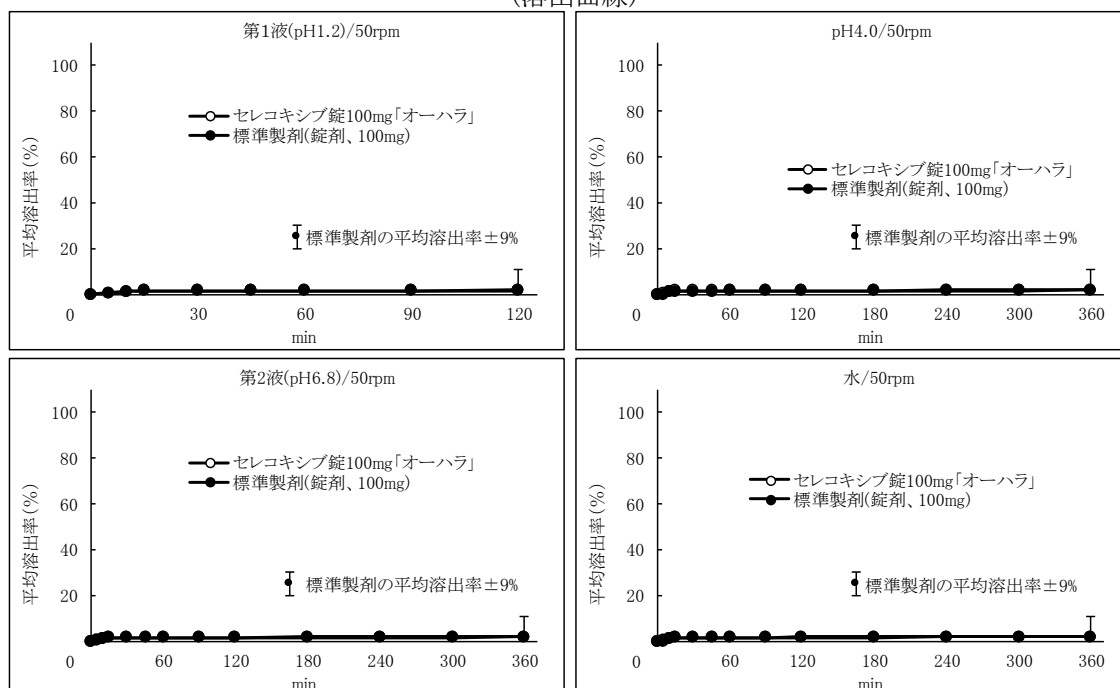
1) 0.5%(w/v)ポリソルベート 80 無添加

表 溶出挙動における類似性(セレコキシブ錠 100mg「オーハラ」及び標準製剤の平均溶出率の比較)

試験条件	溶出時間(分)	平均溶出率(%)		類似性の判定基準 (セレコキシブ錠 100mg「オーハラ」の溶出条件)	判定	
		セレコキシブ錠 100mg「オーハラ」	標準製剤(錠剤、100mg)			
50rpm	pH1.2	120	1.8	1.7	120 分間の平均溶出率が標準製剤の±9%の範囲	適
	pH4.0	360	2.0	1.8	360 分間の平均溶出率が標準製剤の±9%の範囲	適
	pH6.8	360	1.9	1.9	360 分間の平均溶出率が標準製剤の±9%の範囲	適
	水	360	1.9	2.0	360 分間の平均溶出率が標準製剤の±9%の範囲	適

(n=12)

(溶出曲線)



試験液：pH1.2=日本薬局方溶出試験液の第1液
pH6.8=日本薬局方溶出試験液の第2液

pH4.0=薄めたMclvaineの緩衝液
水=日本薬局方精製水

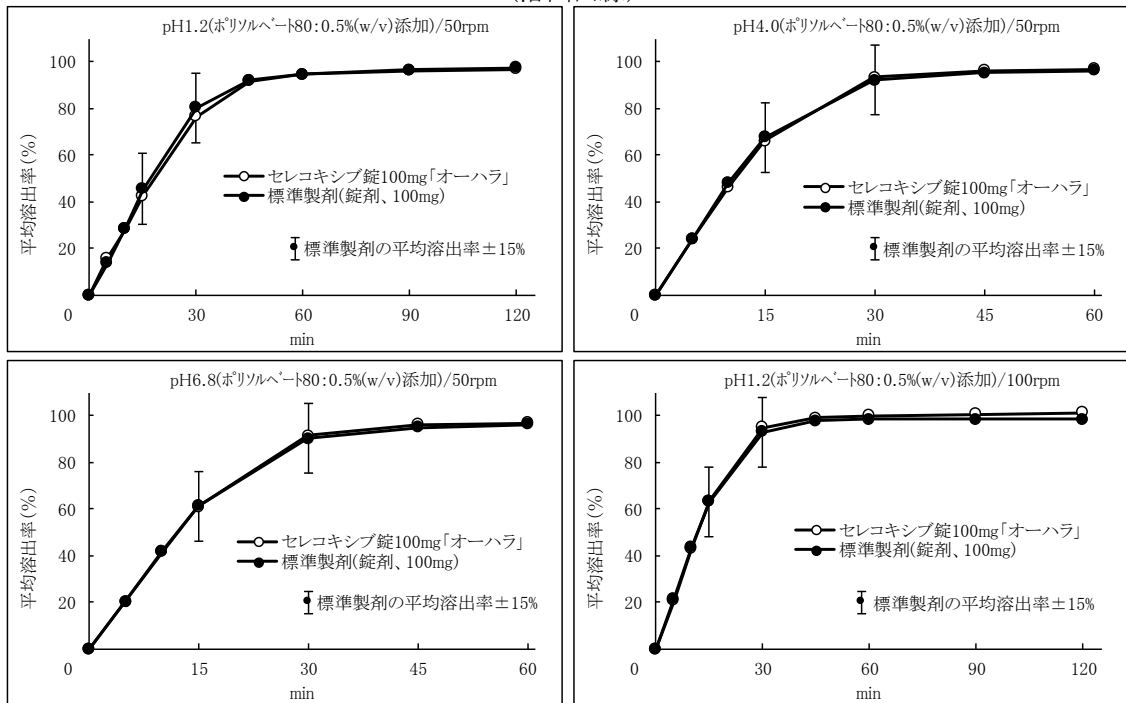
2) 0.5%(w/v)ポリソルベート 80 添加

表 溶出挙動における類似性(セレコキシブ錠 100mg「オーハラ」及び標準製剤の平均溶出率の比較)

試験条件		溶出時間(分)	平均溶出率(%)		類似性の判定基準 (セレコキシブ錠 100mg 「オーハラ」の溶出条件)	判定
			セレコキシブ錠 100mg 「オーハラ」	標準製剤 (錠剤、100mg)		
50rpm	pH1.2	15	42.7	45.6	15 及び 30 分間の平均溶出率が 標準製剤の±15%の範囲	適
		30	76.7	80.4		
	pH4.0	15	66.1	67.6		
		30	93.5	92.2		
	pH6.8	15	61.0	61.3		
		30	91.5	90.2		
100rpm	pH1.2	15	63.6	63.2	15 及び 30 分間の平均溶出率が 標準製剤の±15%の範囲	適
		30	94.9	93.0		

(n=12)

(溶出曲線)



試験液: pH1.2=日本薬局方溶出試験液の第1液
pH6.8=日本薬局方溶出試験液の第2液

pH4.0=薄めたMcIlvaineの緩衝液

(2) セレコキシブ錠 200mg 「オーハラ」

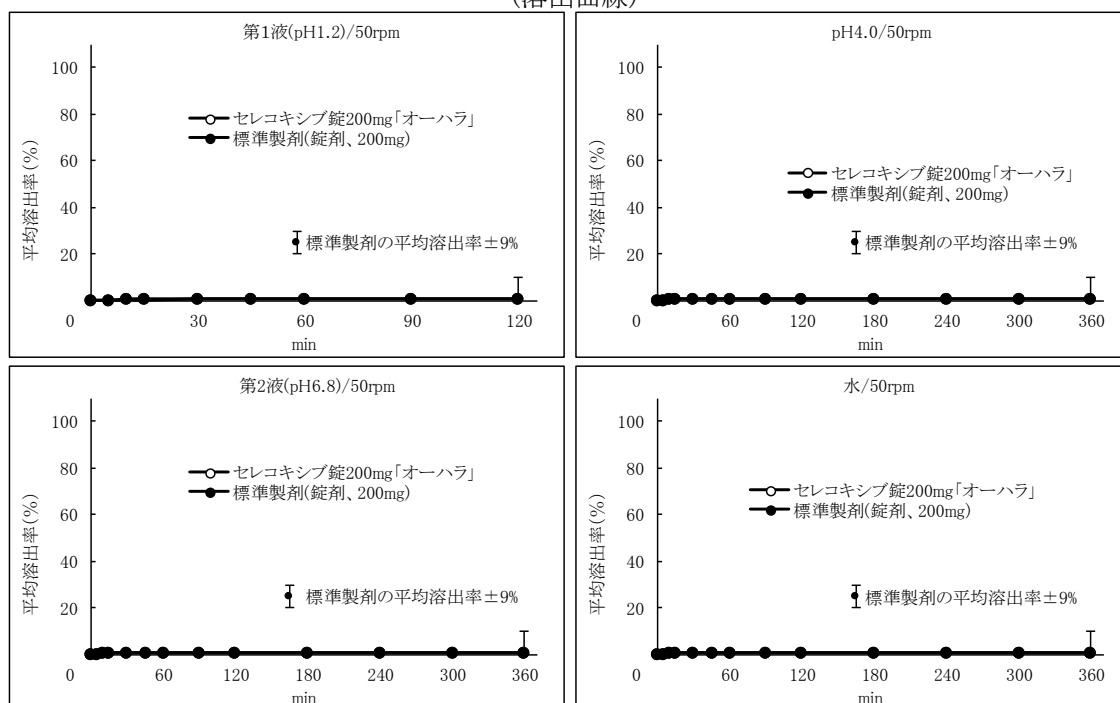
1) 0.5%(w/v)ポリソルベート 80 無添加

表 溶出挙動における類似性(セレコキシブ錠 200mg 「オーハラ」及び標準製剤の平均溶出率の比較)

試験条件		溶出時間(分)	平均溶出率(%)		類似性の判定基準 (セレコキシブ錠 200mg 「オーハラ」の溶出条件)	判定
			セレコキシブ錠 200mg 「オーハラ」	標準製剤(錠剤、200mg)		
50rpm	pH1.2	120	0.6	0.8	120 分間の平均溶出率が標準製剤の±9%の範囲	適
	pH4.0	360	0.8	0.9	360 分間の平均溶出率が標準製剤の±9%の範囲	適
	pH6.8	360	0.8	0.8	360 分間の平均溶出率が標準製剤の±9%の範囲	適
	水	360	0.9	0.8	360 分間の平均溶出率が標準製剤の±9%の範囲	適

(n=12)

(溶出曲線)



試験液: pH1.2=日本薬局方溶出試験液の第1液
pH6.8=日本薬局方溶出試験液の第2液

pH4.0=薄めたMcllvaineの緩衝液
水=日本薬局方精製水

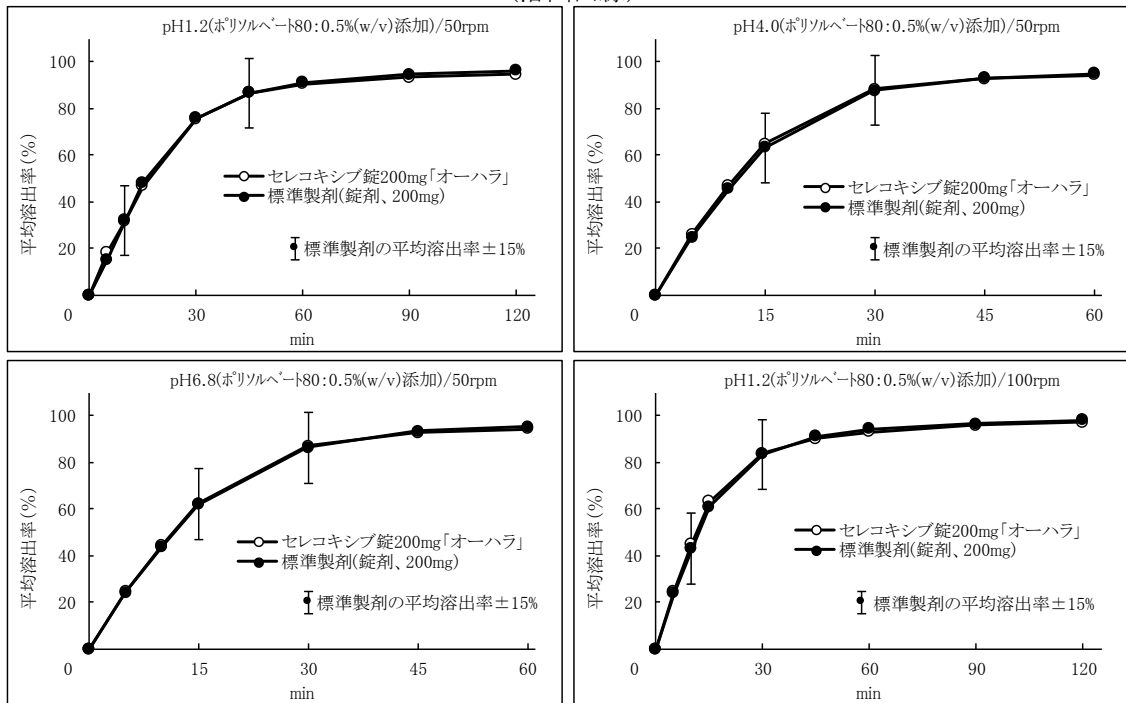
2) 0.5%(w/v)ポリソルベート80添加

表 溶出挙動における類似性(セレコキシブ錠 200mg「オーハラ」及び標準製剤の平均溶出率の比較)

試験条件	溶出時間(分)	平均溶出率(%)		類似性の判定基準 (セレコキシブ錠 200mg 「オーハラ」の溶出条件)	判定	
		セレコキシブ錠 200mg 「オーハラ」	標準製剤 (錠剤、200mg)			
50rpm	pH1.2	10	31.8	32.0	10 及び 45 分間の平均溶出率が 標準製剤の±15%の範囲	適
		45	86.8	86.7		
	pH4.0	15	64.8	63.2	15 及び 30 分間の平均溶出率が 標準製剤の±15%の範囲	適
		30	88.2	87.8		
	pH6.8	15	62.4	62.1	15 及び 30 分間の平均溶出率が 標準製剤の±15%の範囲	適
		30	87.1	86.3		
100rpm	pH1.2	10	45.3	43.0	10 及び 30 分間の平均溶出率が 標準製剤の±15%の範囲	適
		30	83.8	83.4		

(n=12)

(溶出曲線)



試験液: pH1.2=日本薬局方溶出試験液の第1液
pH6.8=日本薬局方溶出試験液の第2液

pH4.0=薄めたMcllvaineの緩衝液

8. 生物学的試験法

該当しない

9. 製剤中の有効成分の確認試験法

液体クロマトグラフィー

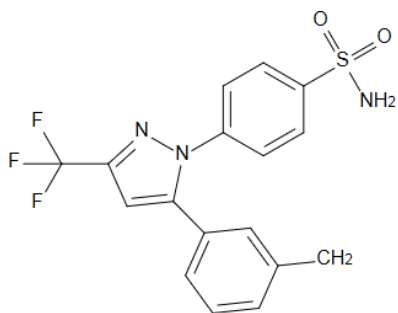
10. 製剤中の有効成分の定量法

液体クロマトグラフィー

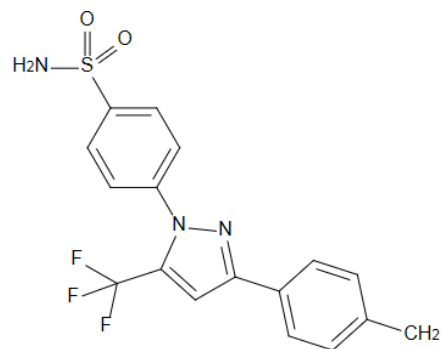
11. カ価

該当しない

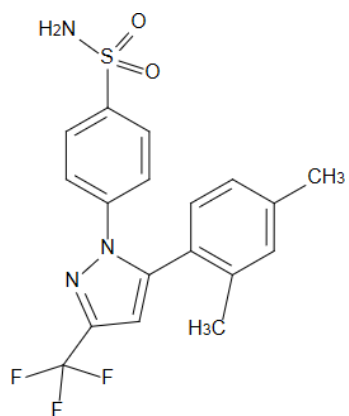
12. 混入する可能性のある夾雑物



類縁物質 A(合成生成物)



類縁物質 B(合成生成物)



類縁物質 C(合成生成物)

13. 注意が必要な容器・外観が特殊な容器に関する情報

特になし

14. その他

特になし

V. 治療に関する項目

1. 効能又は効果

下記疾患並びに症状の消炎・鎮痛

関節リウマチ、変形性関節症、腰痛症、肩関節周囲炎、頸肩腕症候群、腱・腱鞘炎

手術後、外傷後並びに抜歯後の消炎・鎮痛

2. 用法及び用量

関節リウマチ

通常、成人にはセレコキシブとして1回100～200mgを1日2回、朝・夕食後に経口投与する。

変形性関節症、腰痛症、肩関節周囲炎、頸肩腕症候群、腱・腱鞘炎

通常、成人にはセレコキシブとして1回100mgを1日2回、朝・夕食後に経口投与する。

手術後、外傷後並びに抜歯後の消炎・鎮痛

通常、成人にはセレコキシブとして初回のみ400mg、2回目以降は1回200mgとして1日2回経口投与する。なお、投与間隔は6時間以上あけること。

頓用の場合は、初回のみ400mg、必要に応じて以降は200mgを6時間以上あけて経口投与する。ただし、1日2回までとする。

<用法及び用量に関連する使用上の注意>

- (1) 本剤を使用する場合は、有効最小量を可能な限り短期間投与することに留め、長期にわたり漫然と投与しないこと。（「重要な基本的注意」の項参照）
- (2) 慢性疾患（関節リウマチ、変形性関節症等）に対する使用において、本剤の投与開始後2～4週間を経過しても治療効果に改善が認められない場合は、他の治療法の選択について考慮すること。
- (3) 急性疾患（手術後、外傷後並びに抜歯後の消炎・鎮痛）に対する使用において、初回の投与量が2回目以降と異なることに留意すること。また、患者に対し服用方法について十分説明すること。
- (4) 本剤の1年を超える長期投与時の安全性は確立されておらず、外国において、本剤の長期投与により、心筋梗塞、脳卒中等の重篤で場合によっては致命的な心血管系血栓塞栓性事象の発現を増加させるとの報告がある。

3. 臨床成績

(1) 臨床データパッケージ

該当しない

(2) 臨床効果

該当資料なし

(3) 臨床薬理試験

該当資料なし

(4) 探索的試験

該当資料なし

(5) 検証的試験

1) 無作為化並行用量反応試験

該当資料なし

2) 比較試験

該当資料なし

3) 安全性試験

該当資料なし

4) 患者・病態別試験

該当資料なし

(6) 治療的使用

1) 使用成績調査・特定使用成績調査（特別調査）・製造販売後臨床試験（市販後臨床試験）

該当資料なし

2) 承認条件として実施予定の内容又は実施した試験の概要

該当資料なし

VI. 薬効薬理に関する項目

1. 薬理的に関連ある化合物又は化合物群

ロキソプロフェンナトリウム、ジクロフェナクナトリウム、ザルトプロフェン、エトドラク、メロキシカム、ロルノキシカムなどの非ステロイド性消炎・鎮痛剤

2. 薬理作用

(1) 作用部位・作用機序

プロスタグランジン(PG)は、発赤、熱感及び腫脹などの局所の炎症症状の発現に関与し、シクロオキシゲナーゼ(COX)はこのPG生合成の初発酵素である。COXにはCOX-1とCOX-2が存在し、COX-1は多くの組織に常時発現しているが、COX-2は炎症刺激により局所に誘導されPGを生成して炎症の発現に関与する。セレコキシブはCOX-1に対してCOX-2を数倍選択的に阻害することにより局所に生成されるPGを抑制し、抗炎症・鎮痛作用を示すと考えられる¹⁾。

(2) 薬効を裏付ける試験成績

該当資料なし

(3) 作用発現時間・持続時間

該当資料なし

VII. 薬物動態に関する項目

1. 血中濃度の推移・測定法

(1) 治療上有効な血中濃度

該当資料なし

(2) 最高血中濃度到達時間⁵⁾

セレコキシブ錠 100mg 「オーハラ」を1錠：2.35 時間

セレコキシブ錠 200mg 「オーハラ」を1錠：2.25 時間

(3) 臨床試験で確認された血中濃度⁵⁾

生物学的同等性試験

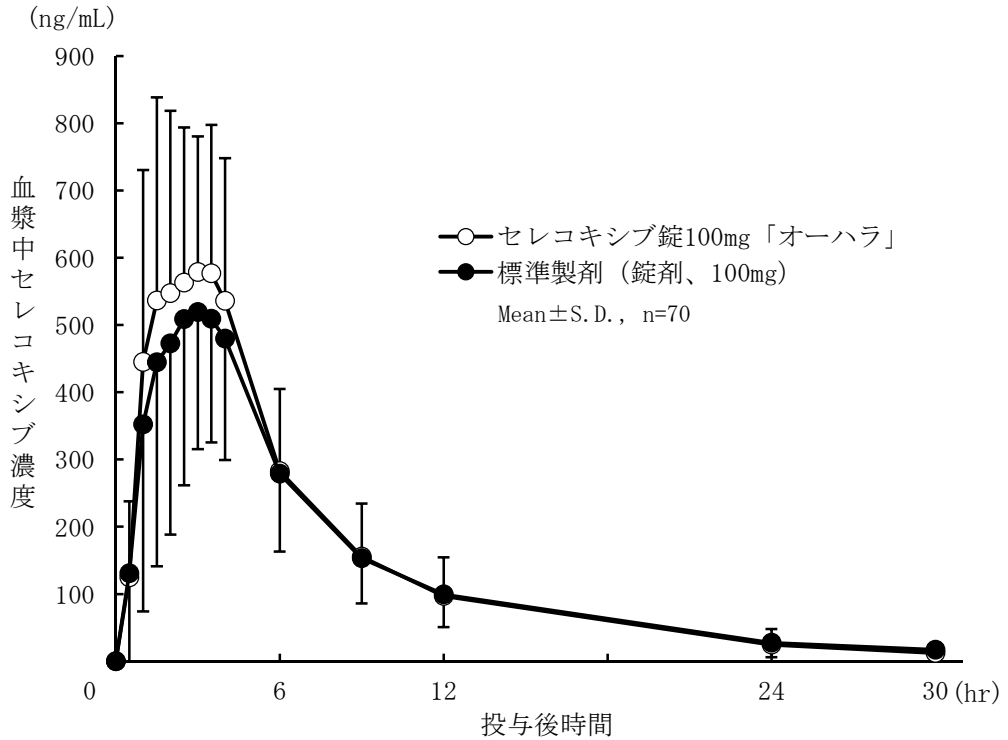
セレコキシブ錠 100mg 「オーハラ」及びセレコキシブ錠 200mg 「オーハラ」と各標準製剤を、クロスオーバー法によりそれぞれ1錠(セレコキシブとしてそれぞれ100mg 及び200mg)健康成人男子に絶食単回経口投与して血漿中未変化体濃度を測定し、得られた薬物動態パラメータ(AUC、 C_{max})について90%信頼区間法にて統計解析を行った結果、いずれも $\log(0.80) \sim \log(1.25)$ の範囲であり、両剤の生物学的同等性が確認された。

1) セレコキシブ錠 100mg「オーハラ」

薬物動態パラメータ

	n	AUC _{0→30} (ng・hr/mL)	C _{max} (ng/mL)	t _{max} (hr)	t _{1/2} (hr)
セレコキシブ錠 100mg 「オーハラ」	70	4511.5 ± 1641.6	748.50 ± 246.37	2.35 ± 1.08	5.8 ± 2.6
標準製剤 (錠剤、100mg)	70	4267.3 ± 1494.2	661.02 ± 224.98	2.64 ± 1.23	6.6 ± 2.7

(Mean ± S. D.)



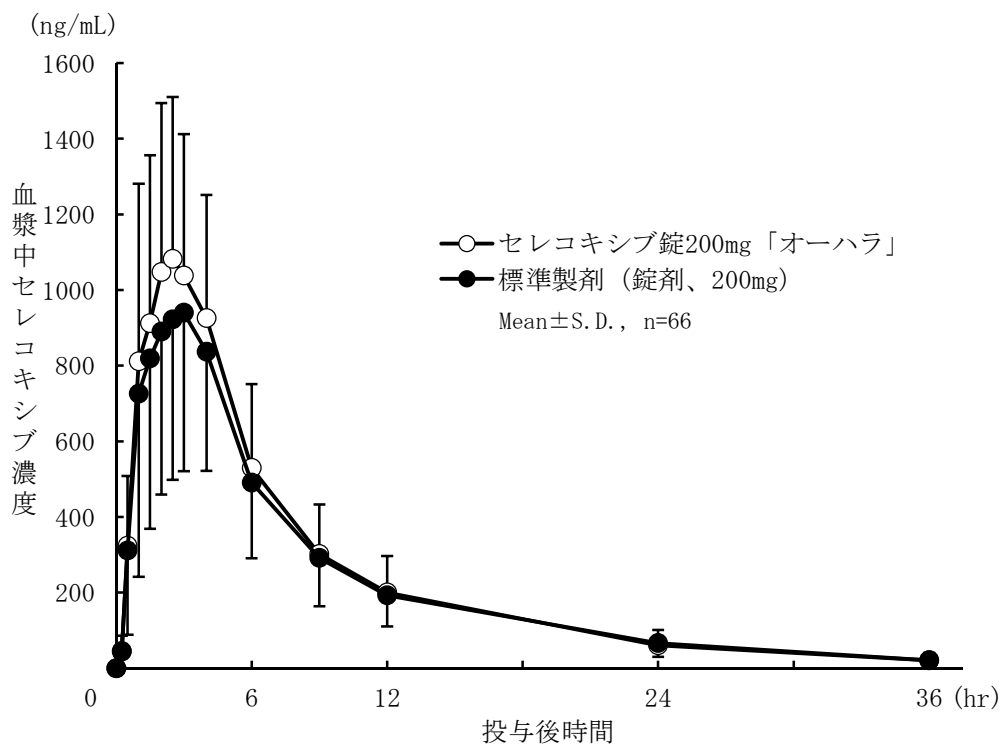
血漿中濃度並びに AUC、C_{max} 等のパラメータは、被験者の選択、血液の採取回数・時間等の試験条件によって異なる可能性がある。

2) セレコキシブ錠 200mg「オーハラ」

薬物動態パラメータ

	n	AUC _{0→36} (ng・hr/mL)	C _{max} (ng/mL)	t _{max} (hr)	t _{1/2} (hr)
セレコキシブ錠 200mg 「オーハラ」	66	8810.2 ± 2680.0	1297.75 ± 405.09	2.25 ± 0.95	7.5 ± 3.8
標準製剤 (錠剤、200mg)	66	8236.1 ± 2580.9	1143.98 ± 440.48	2.33 ± 1.18	7.7 ± 3.2

(Mean ± S. D.)



血漿中濃度並びに AUC、C_{max} 等のパラメータは、被験者の選択、血液の採取回数・時間等の試験条件によって異なる可能性がある。

(4) 中毒域

該当資料なし

(5) 食事・併用薬の影響

「Ⅷ. 安全性 (使用上の注意等) に関する項目 7. 相互作用」の項を参照のこと。

(6) 母集団 (ポピュレーション) 解析により判明した薬物体内動態変動要因

該当資料なし

2. 薬物速度論的パラメータ

(1) 解析方法

該当資料なし

(2) 吸収速度定数

該当資料なし

(3) バイオアベイラビリティ

「VII. 薬物動態に関する項目 1. 血中濃度の推移・測定法 (3)臨床試験で確認された血中濃度」の項を参照のこと。

(4) 消失速度定数⁵⁾

健康成人男子単回投与

	100mg (n=70)	200mg (n=66)
Ke1 (/hr)	0.1397 ± 0.0550	0.1096 ± 0.0400

(Mean ± S. D.)

(5) クリアランス

該当資料なし

(6) 分布容積

該当資料なし

(7) 血漿蛋白結合率

該当資料なし

3. 吸収

該当資料なし

4. 分布

(1) 血液-脳関門通過性

該当資料なし

(2) 血液-胎盤関門通過性

該当資料なし

(3) 乳汁への移行性

該当資料なし

(4) 髄液への移行性

該当資料なし

(5) その他の組織への移行性

該当資料なし

5. 代謝

(1) 代謝部位及び代謝経路

該当資料なし

(2) 代謝に関与する酵素(CYP450 等)の分子種

本剤は、主として薬物代謝酵素 CYP2C9 で代謝される。また、本剤は CYP2D6 の基質ではないが、CYP2D6 の阻害作用を有する

(3) 初回通過効果の有無及びその割合

該当資料なし

(4) 代謝物の活性の有無及び比率

該当資料なし

(5) 活性代謝物の速度論的パラメータ

該当資料なし

6. 排泄

(1) 排泄部位及び経路

該当資料なし

(2) 排泄率

該当資料なし

(3) 排泄速度

該当資料なし

7. トランスポーターに関する情報

該当資料なし

8. 透析等による除去率

該当資料なし

Ⅷ. 安全性(使用上の注意等)に関する項目

1. 警告内容とその理由

【警告】

外国において、シクロオキシゲナーゼ(COX)-2 選択的阻害剤等の投与により、心筋梗塞、脳卒中等の重篤で場合によっては致命的な心血管系血栓塞栓性事象のリスクを増大させる可能性があり、これらのリスクは使用期間とともに増大する可能性があると報告されている。(〈用法・用量に関連する使用上の注意〉、「慎重投与」、「重要な基本的注意」、「副作用(1)重大な副作用」の項参照)

2. 禁忌内容とその理由(原則禁忌を含む)

【禁忌】(次の患者には投与しないこと)

- (1) 本剤の成分又はスルホンアミドに対し過敏症の既往歴のある患者
- (2) アスピリン喘息(非ステロイド性消炎・鎮痛剤等による喘息発作の誘発)又はその既往歴のある患者〔重症喘息発作を誘発するおそれがある。〕
- (3) 消化性潰瘍のある患者〔消化性潰瘍を悪化させるおそれがある。(「慎重投与」の項参照)〕
- (4) 重篤な肝障害のある患者〔肝障害を悪化させるおそれがある。〕
- (5) 重篤な腎障害のある患者〔腎障害を悪化させるおそれがある。〕
- (6) 重篤な心機能不全のある患者〔プロスタグランジン合成阻害作用に基づくナトリウム・水分貯留傾向があるため心機能を悪化させるおそれがある。〕
- (7) 冠動脈バイパス再建術の周術期患者〔外国において、類薬で心筋梗塞及び脳卒中の発現が増加するとの報告がある。〕
- (8) 妊娠末期の女性(「妊婦、産婦、授乳婦等への投与」の項参照)

3. 効能又は効果に関連する使用上の注意とその理由

該当しない

4. 用法及び用量に関連する使用上の注意とその理由

「Ⅴ. 治療に関する項目」を参照すること。

5. 慎重投与内容とその理由

慎重投与(次の患者には慎重に投与すること)

- (1) 心血管系疾患又はその既往歴のある患者(「重要な基本的注意」の項参照)
- (2) 心機能障害のある患者〔水、ナトリウムの貯留が起こる可能性があり、心機能障害を悪化させるおそれがある。〕
- (3) 高血圧症のある患者〔水、ナトリウムの貯留が起こる可能性があり、血圧を上昇させるおそれがある。〕
- (4) 消化性潰瘍の既往歴のある患者〔消化性潰瘍を再発させるおそれがある。〕

慎重投与（次の患者には慎重に投与すること）

- (5) 非ステロイド性消炎・鎮痛剤の長期投与による消化性潰瘍のある患者で、本剤の長期投与が必要であり、かつミソプロストールによる治療が行われている患者〔ミソプロストールは非ステロイド性消炎・鎮痛剤により生じた消化性潰瘍を効能・効果としているが、ミソプロストールによる治療に抵抗性を示す消化性潰瘍もあるので、本剤を継続投与する場合には、十分経過を観察し、慎重に投与すること。〕
- (6) 気管支喘息のある患者〔喘息発作を誘発するおそれがある。〕
- (7) 肝障害又はその既往歴のある患者〔これらの患者では血中濃度が高くなるとの報告があるので、用量を減らすなど慎重に投与すること。〕
- (8) 腎障害又はその既往歴のある患者〔腎血流量低下及び水、ナトリウムの貯留が起こる可能性があり、腎障害を悪化又は再発させるおそれがある。〕
- (9) 高齢者（「高齢者への投与」の項参照）

6. 重要な基本的注意とその理由及び処置方法

重要な基本的注意

- (1) 本剤の投与により、心筋梗塞、脳卒中等の重篤で場合によっては致命的な心血管系血栓性事象が発現するおそれがあるので、観察を十分に行之、これらの徴候及び症状の発現には十分に注意すること。（「副作用」の項参照）
- (2) 本剤には血小板に対する作用がないので、心血管系疾患予防の目的でアスピリンの代替薬として使用しないこと。抗血小板療法を行っている患者については、本剤投与に伴い、その治療を中止してはならない。
- (3) 国内で患者を対象に実施した臨床試験では COX-2 に対して選択性の高い本剤と選択性の低い非ステロイド性消炎・鎮痛剤による消化管の副作用発現率に差は認められなかった。特に、消化管障害発生のリスクファクターの高い患者への投与に際しては副作用の発現に十分な観察を行うこと。
- (4) 本剤の投与により、中毒性表皮壊死融解症(Toxic Epidermal Necrolysis: TEN)、皮膚粘膜眼症候群(Stevens-Johnson 症候群)等の重篤で場合によっては致命的な皮膚症状が発現するおそれがあり、多くの場合、これらの事象は投与開始後1ヵ月以内に発現しているため、治療初期には特に注意すること。（「副作用」の項参照）
- (5) 慢性疾患（関節リウマチ、変形性関節症等）に対し本剤を用いる場合には、次の事項を考慮すること。
 - 1) 定期的あるいは必要に応じて臨床検査（尿検査、血液検査、腎機能検査、肝機能検査、心電図検査及び便潜血検査等）を行い、異常が認められた場合には、休薬や投与中止等の適切な処置を行うこと。
 - 2) 消炎・鎮痛剤による治療は原因療法ではなく、対症療法であることに留意すること。また、薬物療法以外の療法も考慮すること。
- (6) 急性疾患（手術後、外傷後並びに抜歯後の消炎・鎮痛）に対し本剤を用いる場合には、次の事項を考慮すること。
 - 1) 急性炎症及び疼痛の程度を考慮し、投与すること。
 - 2) 原則として長期投与を避けること。
 - 3) 原因療法があればこれを行い、本剤を漫然と投与しないこと。
- (7) 他の消炎・鎮痛剤（心血管系疾患予防の目的で使用するアスピリンを除く）との併用は避けることが望ましい。
- (8) 本剤で報告されている薬理作用により、感染症を不顕性化するおそれがあるので、感染症の発現に十分に注意し慎重に投与すること。

重要な基本的注意

(9) 浮動性めまい、回転性めまい、傾眠等が起こることがあるので、自動車の運転等危険を伴う作業に従事する場合には注意させること。

7. 相互作用

本剤は主として薬物代謝酵素 CYP2C9 で代謝される。
また、本剤は CYP2D6 の基質ではないが、CYP2D6 の阻害作用を有する。

(1) 併用禁忌とその理由

該当しない

(2) 併用注意とその理由

併用注意（併用に注意すること）		
薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
ACE 阻害剤 エナラプリルマレイン酸塩 イミダプリル塩酸塩 テモカプリル塩酸塩 等 アンジオテンシン II 受容体拮抗剤 カンデサルタンシレキセチル バルサルタン ロサルタンカリウム 等	非ステロイド性消炎・鎮痛剤(NSAID)はアンジオテンシン変換酵素(ACE)阻害剤の降圧効果を減弱させる可能性があるとの報告がある。本剤とACE阻害剤又はアンジオテンシン II 受容体拮抗剤との相互作用は明らかではないが、併用する場合は相互作用の起こる可能性を考慮すること。(なお、リシノプリルを併用した臨床試験では、顕著な血圧変化は認められなかったとの報告がある)	他の NSAID では、腎臓におけるプロスタグランジン合成阻害によると考えられている。
フロセミド チアジド系利尿剤 トリクロルメチアジド ヒドロクロロチアジド 等	患者によっては他の NSAID がフロセミド及びチアジド系利尿剤のナトリウム排泄作用を低下させることが示されている。本剤と、フロセミド又はチアジド系利尿剤との相互作用は明らかではないが、併用する場合は相互作用の起こる可能性を考慮すること。	他の NSAID では、腎臓におけるプロスタグランジン合成阻害によると考えられている。

併用注意（併用に注意すること）

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
アスピリン	本剤と低用量アスピリン(1日325mg以下)を併用した場合、本剤のみを服用したときに比べて消化性潰瘍・消化管出血等の発生率が高くなることが報告されている。	主にアスピリン併用によるNSAIDの消化性潰瘍・消化管出血等を助長させると考えられている。
抗血小板薬 クロピドグレル 等	本剤と抗血小板薬を併用した場合、本剤のみを服用したときに比べて消化管出血の発生率が高くなることが報告されている。	これらの薬剤は血小板凝集抑制作用を有するため、NSAIDの消化管出血を助長させると考えられている。
リチウム	リチウムの血漿中濃度が上昇し、リチウムの作用が増強するおそれがある。リチウムを使用中の患者に本剤の投与を開始又は中止するときには十分に患者をモニターすること。	機序は明らかではないが、腎排泄を阻害するためと考えられている。
フルコナゾール	本剤の血漿中濃度が上昇し、本剤の作用が増強するおそれがある。フルコナゾールを使用中の患者には本剤の投与を低用量から開始すること。	CYP2C9による本剤の代謝を阻害すると考えられている。
フルバスタチン	本剤及びフルバスタチンの血漿中濃度が上昇し、本剤及びフルバスタチンの作用が増強するおそれがある。	CYP2C9による本剤の代謝を阻害するため、また本剤と同じCYP2C9で代謝されるためと考えられている。
クマリン系抗凝血剤 ワルファリン	プロトロンビン時間が延長するおそれがある。海外で特に高齢者において、重篤で場合によっては致命的な出血が報告されている。ワルファリンを使用中の患者に本剤の投与を開始あるいは用法を変更する際には十分注意して観察すること。	CYP2C9を介する代謝の競合阻害によると考えられている。

併用注意（併用に注意すること）		
薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
パロキセチン	本剤の血漿中濃度が低下し、パロキセチンの血漿中濃度が上昇した。本剤の作用が減弱し、パロキセチンの作用が増強するおそれがある。	CYP2D6 の阻害作用によると考えられている。
デキストロメトルフアン	デキストロメトルフアンの血漿中濃度が上昇し、デキストロメトルフアンの作用が増強するおそれがある。	
制酸剤 アルミニウム製剤 マグネシウム製剤 等	本剤の血漿中濃度が低下し、本剤の作用が減弱するおそれがある。	機序は明らかでない。

8. 副作用

(1) 副作用の概要

本剤は使用成績調査等の副作用発現頻度が明確となる調査を実施していない。

(2) 重大な副作用と初期症状

重大な副作用（頻度不明）

- 1) **ショック、アナフィラキシー**：ショック、アナフィラキシー、呼吸困難、血管浮腫、血管炎、気管支痙攣等の重篤な過敏症の発現が報告されているので、このような症状が認められた場合は投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- 2) **消化性潰瘍、消化管出血、消化管穿孔**：消化性潰瘍、消化管出血、消化管穿孔の発現が報告されているので、吐血、下血（メレナ）等の症状が認められた場合は投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- 3) **心筋梗塞、脳卒中**：心筋梗塞、脳卒中等の重篤で場合によっては致命的な心血管系血栓塞栓性事象が報告されているので、このような症状が認められた場合は投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- 4) **心不全、うっ血性心不全**：心不全、うっ血性心不全の発現が報告されているので、このような症状が認められた場合は投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- 5) **肝不全、肝炎、肝機能障害、黄疸**：肝不全、肝炎、AST(GOT)、ALT(GPT)、ビリルビン等の上昇、黄疸の発現が報告されているので、定期的に肝機能検査を行うなど観察を十分に行い、異常が認められた場合は投与を中止するなど、適切な処置を行うこと。
- 6) **再生不良性貧血、汎血球減少症、無顆粒球症**：再生不良性貧血、汎血球減少症、無顆粒球症、白血球減少症、血小板減少症の発現が報告されているので、このような異常が認められた場合は投与を中止し、適切な処置を行うこと。

重大な副作用（頻度不明）

- 7) **急性腎障害、間質性腎炎**：急性腎障害、間質性腎炎等の重篤な腎障害の発現が報告されているので、定期的に腎機能検査を行うなど観察を十分に行い、異常が認められた場合は投与を中止するなど、適切な処置を行うこと。
- 8) **中毒性表皮壊死融解症 (Toxic Epidermal Necrolysis : TEN)、皮膚粘膜眼症候群 (Stevens-Johnson 症候群)、多形紅斑、急性汎発性発疹性膿疱症、剥脱性皮膚炎**：中毒性表皮壊死融解症、皮膚粘膜眼症候群、多形紅斑、急性汎発性発疹性膿疱症、剥脱性皮膚炎等の重篤で場合によっては致命的な皮膚症状の発現が報告されているので、観察を十分に行い、発疹、粘膜障害もしくは他の過敏症に関連する徴候が認められた場合は直ちに投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- 9) **間質性肺炎**：間質性肺炎があらわれることがあるので、咳嗽、呼吸困難、発熱、肺音の異常(捻髪音)等が認められた場合には、速やかに胸部 X 線、胸部 CT、血清マーカー等の検査を実施すること。間質性肺炎が疑われた場合には投与を中止し、副腎皮質ホルモン剤の投与等の適切な処置を行うこと。

(3) その他の副作用

	副作用の頻度	
	頻度不明	
全 身	倦怠感、口渇、末梢性浮腫、悪寒、全身浮腫、疲労、ほてり、体重増加、インフルエンザ様疾患	
精 神 神 経 系	傾眠、頭痛、浮動性めまい、味覚異常、酩酊感、体位性めまい、感覚鈍麻、意識レベルの低下、不眠症、睡眠障害、錯乱状態、不安、幻覚、筋緊張亢進、無嗅覚	
肝 胆 道 系	ALT(GPT)増加、AST(GOT)増加、 γ -GTP増加、ALP増加、血中ビリルビン増加、尿ウロビリノーゲン陽性	
代 謝 ・ 栄 養	BUN増加、CK(CPK)増加、食欲不振、LDH増加、尿糖陽性、糖尿病、血中カリウム増加、血中ナトリウム増加	
消 化 器	腹痛、口内炎、下痢、便潜血陽性、悪心、鼓腸、消化不良、便秘、胃炎、口内乾燥、舌障害、嘔吐、口角びらん、腹部膨満、上腹部痛、胃不快感、胃腸障害、舌炎、口腔内痛、食道炎、口の感覚鈍麻、アフタ性口内炎、口腔粘膜水疱形成、心窩部不快感、胃腸炎、歯の脱落、口腔内潰瘍、嚥下障害、胃食道逆流性疾患、膵炎、憩室、過敏性腸症候群、痔出血、排便回数増加	
泌 尿 器	β_2 -マイクログロブリン増加、NAG増加、尿潜血陽性、尿蛋白陽性、多尿、尿閉、頻尿、腎機能障害、腎結石症、良性前立腺肥大症、前立腺炎、PSA増加、血中クレアチニン増加	
循 環 器	高血圧、潮紅、動悸、高血圧増悪、循環虚脱、不整脈、頻脈、洞性徐脈、狭心症、不安定狭心症、大動脈弁閉鎖不全症、冠動脈硬化症、心室肥大、深部静脈血栓症、血腫	
呼 吸 器	咽頭炎、鼻出血、鼻咽頭炎、気管支炎、咳嗽、鼻炎、副鼻腔炎、呼吸困難、発声障害	

	副作用の頻度	
	頻度不明	
皮膚	発疹、そう痒症、顔面浮腫、紅斑性皮疹、湿疹、蕁麻疹、薬疹、点状出血、斑状丘疹状皮疹、皮膚乾燥、頭部黚糠疹、多汗、皮膚炎、紅斑、斑状出血、光線過敏性反応、脱毛症、水疱性皮膚炎	
感覚器	耳鳴、回転性めまい、耳痛、霧視、眼そう痒症、硝子体浮遊物、結膜出血、聴力低下	
その他	背部痛、筋硬直、関節痛、四肢痛、不正子宮出血、月経障害、ウイルス感染、細菌性腸炎、頸部痛、貧血、ヘマトクリット減少、ヘモグロビン増加、真菌感染、細菌感染、ヘリコバクター感染、尿路感染、上気道感染、耳感染、帯状疱疹、丹毒、創傷感染、歯肉感染、迷路炎、アレルギー増悪、無菌性髄膜炎、筋痙縮、脂肪腫、ガングリオン、臆出血、乳房圧痛、卵巣嚢胞、閉経期症状、血中テストステロン減少、上顎炎、腱断裂、骨折、損傷	

(4) 項目別副作用発現頻度及び臨床検査値異常一覧

該当資料なし

(5) 基礎疾患、合併症、重症度及び手術の有無等背景別の副作用発現頻度

該当資料なし

(6) 薬物アレルギーに対する注意及び試験法

【禁忌】（次の患者には投与しないこと）

(1) 本剤の成分又はスルホンアミドに対し過敏症の既往歴のある患者

重大な副作用（頻度不明）

(1) ショック、アナフィラキシー：ショック、アナフィラキシー、呼吸困難、血管浮腫、血管炎、気管支痙攣の重篤な過敏症の発現が報告されているので、このような症状が認められた場合は投与を中止し、適切な処置を行うこと。

9. 高齢者への投与

高齢者では患者の状態を観察しながら、慎重に投与すること。〔一般的に高齢者では生理機能が低下している。〕

10. 妊婦，産婦，授乳婦等への投与

(1) 妊婦等：

- 1) 妊娠末期には投与しないこと。〔妊娠末期のマウス⁶⁾及びヒツジ⁷⁾への投与において、胎児の動脈管収縮が報告されている。〕
- 2) 妊娠(妊娠末期以外)又は妊娠している可能性のある女性には、治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与すること。投与する際には、必要最小限にとどめ、適宜羊水量を確認するなど慎重に投与すること。
〔妊娠中の投与に関する安全性は確立していない。シクロオキシゲナーゼ阻害剤(経口剤、坐剤)を妊婦に使用し、胎児の腎機能障害及び尿量減少、それに伴う羊水過少症が起きたとの報告がある。培養細胞を用いた染色体異常試験において、細胞毒性が認められる濃度で染色体の数的異常(核内倍加細胞の増加)が、生殖発生毒性試験で着床後死亡数や死産の増加、横隔膜ヘルニア、胎児体重減少等が認められている。またラットにおいて本剤が胎児に移行することが報告されている。〕

(2) 授乳婦：授乳中の婦人に投与する場合には授乳を避けさせること。〔ヒト母乳中への移行が報告されている⁸⁾⁹⁾。〕

11. 小児等への投与

低出生体重児、新生児、乳児、幼児、小児に対する安全性は確立していない。(使用経験がない。)

12. 臨床検査結果に及ぼす影響

該当資料なし

13. 過量投与

該当資料なし

14. 適用上の注意

薬剤交付時：PTP包装の薬剤はPTPシートから取り出して服用するよう指導すること。〔PTPシートの誤飲により、硬い鋭角部が食道粘膜へ刺入し、更には穿孔を起こして縦隔洞炎等の重篤な合併症を併発することが報告されている。〕

15. その他の注意

外国におけるクロスオーバー二重盲検比較試験において、本剤非投与時に比べて本剤投与時に排卵障害の割合が増加したとの報告がある。また、他の非ステロイド性消炎・鎮痛剤を長期間投与されている女性において、一時的な不妊が認められたとの報告がある。

16. その他

特になし

IX. 非臨床試験に関する項目

1. 薬理試験

(1) 薬効薬理試験(「VI. 薬効薬理に関する項目」参照)

(2) 副次的薬理試験

該当資料なし

(3) 安全性薬理試験

該当資料なし

(4) その他の薬理試験

該当資料なし

2. 毒性試験

(1) 単回投与毒性試験

該当資料なし

(2) 反復投与毒性試験

該当資料なし

(3) 生殖発生毒性試験

該当資料なし

(4) その他の特殊毒性

該当資料なし

X. 管理的事項に関する項目

1. 規制区分

製剤：セレコキシブ錠 100mg「オーハラ」 劇薬、処方箋医薬品^{注)}

セレコキシブ錠 200mg「オーハラ」 劇薬、処方箋医薬品^{注)}

注) 注意－医師等の処方箋により使用すること

有効成分：セレコキシブ 劇薬

2. 有効期間又は使用期限

使用期限：3年（安定性試験結果に基づく）※

※安定性試験：最終包装製品を用いた加速試験（40℃、相対湿度 75%、6 ヶ月）の結果、セレコキシブ錠 100mg「オーハラ」及びセレコキシブ錠 200mg「オーハラ」は通常の市場流通下において3年間安定であることが推測された³⁾。

3. 貯法・保存条件

室温保存、気密容器

4. 薬剤取扱い上の注意点

(1) 薬局での取り扱い上の留意点について

該当資料なし

(2) 薬剤交付時の取扱いについて(患者等に留意すべき必須事項等)

- ・ 浮動性めまい、回転性めまい、傾眠等が起こることがあるので、自動車の運転等危険を伴う作業に従事する場合には注意させること。（「Ⅷ. 6. 重要な基本的注意とその理由及び処置方法 重要な基本的注意(9)」の項参照）
- ・ その他「Ⅷ. 安全性（使用上の注意等）に関する項目 14. 適用上の注意」の項を参照すること。
- ・ くすりのしおり：有り
- ・ 患者向医薬品ガイド：有り
- ・ 患者用指導箋：有り
「セレコキシブ錠 100mg「オーハラ」、セレコキシブ錠 200mg「オーハラ」を服用される患者様へ」

（大原薬品工業ホームページ(<https://www.ohara-ch.co.jp>)に掲載

(3) 調剤時の留意点について

該当資料なし

5. 承認条件等

該当しない

6. 包装

セレコキシブ錠 100mg「オーハラ」： (PTP) 100錠 (10錠×10)
140錠 (14錠×10)
500錠 (10錠×50)
(バラ) 300錠
セレコキシブ錠 200mg「オーハラ」： (PTP) 100錠 (10錠×10)
140錠 (14錠×10)
(バラ) 300錠

7. 容器の材質

PTP包装

PTP:ポリ塩化ビニル、アルミ箔、

バラ包装

ボトル：ポリエチレン、キャップ：ポリプロピレン

8. 同一成分・同効薬

同一成分薬：セレコックス®錠 100mg、セレコックス®錠 200mg

同効薬：ロキソプロフェンナトリウム、ジクロフェナクナトリウム、ザルトプロフェン、エトドラク、メロキシカム、ロルノキシカム、ナプロキセン、イブプロフェン

9. 国際誕生年月日

1998年12月31日

10. 製造販売承認年月日及び承認番号

製造販売承認年月日：2020年2月17日

承認番号：

セレコキシブ錠 100mg「オーハラ」：30200AMX00367000

セレコキシブ錠 200mg「オーハラ」：30200AMX00368000

11. 薬価基準収載年月日

2020年6月19日

12. 効能又は効果追加，用法及び用量変更追加等の年月日及びその内容

該当しない

13. 再審査結果，再評価結果公表年月日及びその内容

該当しない

14. 再審査期間

該当しない

15. 投薬期間制限医薬品に関する情報

本剤は厚生労働大臣の定める「投薬期間に上限が設けられている医薬品」に該当しない。

16. 各種コード

	HOT9	厚生労働省薬価基準 収載医薬品コード	レセプト電算処理 システムコード
セレコキシブ錠 100mg 「オーハラ」	127973301	1149037F1089	622797301
セレコキシブ錠 200mg 「オーハラ」	127974001	1149037F2085	622797401

17. 保険給付上の注意

本剤は保険診療上の後発医薬品である。

X I . 文献

1. 引用文献

- 1) 田中千賀子 他編：NEW 薬理学 改訂第7版，南江堂，463(2017)
- 2) 大原薬品工業株式会社 社内資料：苛酷試験
- 3) 大原薬品工業株式会社 社内資料：安定性試験
- 4) 大原薬品工業株式会社 社内資料：溶出試験
- 5) 大原薬品工業株式会社 社内資料：生物学的同等性試験
- 6) Sakai, M. et al.: Mol. Hum. Reprod. 7(6) : 595, 2001
- 7) Takahashi, Y. et al.: Am. J. Physiol. Regul. Integr. Comp. Physiol. 278(6) : R1496, 2000
- 8) Knoppert, D.C. et al.: Pharmacotherapy 23(1) : 97, 2003
- 9) Hale, T.W. et al.: J. Hum. Lact. 20(4) : 397, 2004
- 10) 大原薬品工業株式会社 社内資料：粉碎後の安定性試験
- 11) 大原薬品工業株式会社 社内資料：経管通過性試験

2. その他の参考文献

該当資料なし

X II . 参考資料

1. 主な外国での発売状況

本剤は海外では発売されていない。

なお、セレコキシブ製剤としては海外で販売されている。

(2021年3月時点)

2. 海外における臨床支援情報

該当しない

XIII. 備考

1. 調剤・服薬支援に際して臨床判断を行うにあたっての参考情報

本項の情報に関する注意：本項には承認を受けていない品質に関する情報が含まれる。試験方法等が確立していない内容も含まれており、あくまでも記載されている試験方法で得られた結果を事実として提示している。医療従事者が臨床適用を検討する上での参考情報であり、加工等の可否を示すものではない。

(掲載根拠：「医療用医薬品の販売情報提供活動に関するガイドラインに関する Q&A について (その3)」令和元年9月6日付厚生労働省医薬・生活衛生局監視指導・麻薬対策課 事務連絡)

(1) 粉碎¹⁰⁾

セレコキシブ錠 100mg、200mg「オーハラ」の粉碎品について保存し、安定性試験(性状、定量)を行った。

セレコキシブ錠 100mg、200mg「オーハラ」

保存条件	結果
25℃、60%RH、3 ヶ月(遮光・開放)	変化なし

(2) 崩壊・懸濁性及び経管投与チューブの通過性¹⁾

試験方法

〔崩壊懸濁試験〕

注入器のピストン部を抜き取り、注入器内に錠剤をそのまま1個入れてピストンを戻し、注入器に約55℃の温湯20mLを吸い取り、筒先の蓋をして5分間自然放置する。5分後に注入器を手で90度15往復横転し、崩壊・懸濁の状態を観察する。5分後に崩壊しない場合、さらに5分間放置後、同様の操作を行う。10分間放置しても崩壊・懸濁しない場合、この方法を中止する。錠剤1個につきシートの上から乳棒で数回叩いてコーティング破壊してから注入器内に入れて同様の試験を行う。この方法で10分間放置しても崩壊・懸濁しない場合、経管投与不可と判断する。

〔通過性試験〕

崩壊懸濁試験で得られた懸濁液を、ディスペンサーに吸い取り、経管チューブの注入端より2~3mL/秒の速度で注入する。チューブはベッド上の患者を想定し、体内挿入端から3分の2を水平にし、他端（注入端）を30cmの高さにセットし、サイズ8Fr.、12Fr.、14Fr.、16Fr.、18Fr.のチューブに注入し、通過性を観察する。ただし、チューブサイズ8Fr.を通過した場合は他のチューブサイズの試験はする必要はない。

薬を注入した後に適量の水を同じ注入器で吸い取り、注入してチューブ内を洗う時、注入器内・チューブ内に薬が残存していなければ通過性に問題なしとする

セレコキシブ錠 100mg、200mg 「オーハラ」

試験方法	崩壊懸濁試験	通過性試験	判定
試験結果	10分間では完全に崩壊・懸濁しなかった。錠剤を破壊すれば5分後に崩壊・懸濁した。	チューブ（8フレンチ）を通過した。	適2

2. その他の関連資料

特になし

付 表

薬食発 1121 第 2 号（平成 26 年 11 月 21 日）に基づく承認申請時に添付する資料
別表 1 及び別表 2-(1) 医療用医薬品より改変

添付資料の内容		新有効成分含有 製剤 (先発医薬品)	その他の医薬品 (後発医薬品)	剤形追加に係る 医薬品 (後発医薬品)
イ 起原又は発見の経緯及び外国における使用状況等に関する資料	1 起原又は発見の経緯	○	×	○
	2 外国における使用状況	○	×	○
	3 特性及び他の医薬品との比較検討等	○	×	○
ロ 製造方法並びに規格及び試験方法等に関する資料	1 構造決定及び物理化学的性質等	○	×	×
	2 製造方法	○	△	○
	3 規格及び試験方法	○	○	○
ハ 安定性に関する資料	1 長期保存試験	○	×	△
	2 苛酷試験	○	×	△
	3 加速試験	○	○	○
ニ 薬理作用に関する資料	1 効力を裏付ける試験	○	×	×
	2 副次的薬理・安全性薬理	○	×	×
	3 その他の薬理	△	×	×
ホ 吸収、分布、代謝、排泄に関する資料	1 吸収	○	×	×
	2 分布	○	×	×
	3 代謝	○	×	×
	4 排泄	○	×	×
	5 生物学的同等性	×	○	○
	6 その他の薬物動態	△	×	×
ヘ 急性毒性、亜急性毒性、慢性毒性、催奇形性その他の毒性に関する資料	1 単回投与毒性	○	×	×
	2 反復投与毒性	○	×	×
	3 遺伝毒性	○	×	×
	4 がん原性	△	×	×
	5 生殖発生毒性	○	×	×
	6 局所刺激性	△	×	×
	7 その他の毒性	△	×	×
ト 臨床試験の成績に関する資料	臨床試験成績	○	×	×
チ 法第五十二条第一項に規定する添付文書等記載事項に関する資料	添付文書等記載事項	○	○ ¹⁾	○

○：添付 ×：添付不要 △：個々の医薬品により判断される

1) 製造方法の変更又は試験方法の変更等、添付文書の記載に変更を生じない内容に関する申請に限り、原則として、チの資料の添付は要しない。

平成 26 年 11 月 25 日以後、承認申請時に適用される。